【土木史研究　講演集　Vol.30　2010年】

彦根市の歴史まちづくり事業の展開

－「再発見と新創造」世代をつなぎ未来に誇れる彦根城下町へ－

久保　達彦**

By Tatsuhiko KUBO

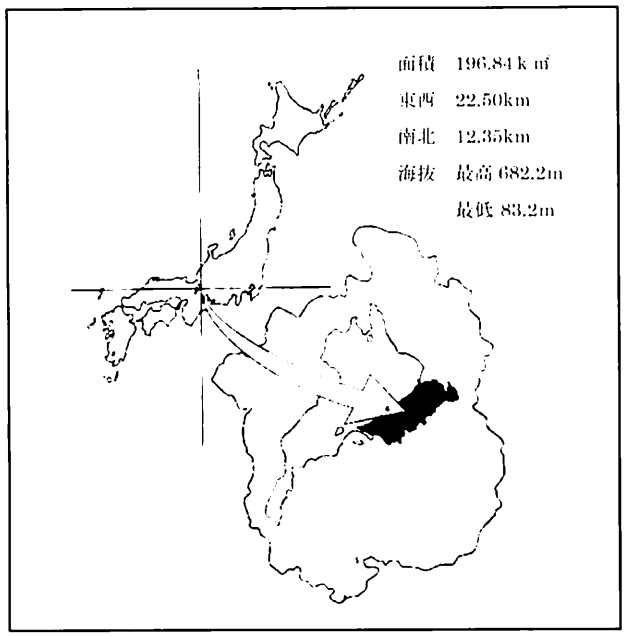
彦根市は、伝統的な工芸品の製造販売や祭礼行事など地域の歴史や伝統を反映した人々の活動が、城や社寺をはじめ歴史上価値の高い建造物とその周辺の建造物等とか相まって、情緒や風情を有する極めて良好な歴史的風致を形成している。

しかし一方で、高度経済成長の下で都市開発が進行し、人々のライフスタイルや価値観の多様化等の進展により、本市における歴史的風致が損なわれつつある。彦根には、歴史の中で培われてきた文化遺産が多く残されており、これらを保存・活用しながら彦根の歴史的風致を維持向上し、後世に伝えていくことが重要である。また、近年、彦根城の世界遺産登録をめざした運動が高まり、その価値の再評価と保護に努めるとともに、周辺環境の保護および整備が求められている。

このような背景の下、彦根固有の歴史的風致を維持し、さらなる向上を図るため、「彦根市歴史的風致維持向上計画」を策定した。

1．はじめに

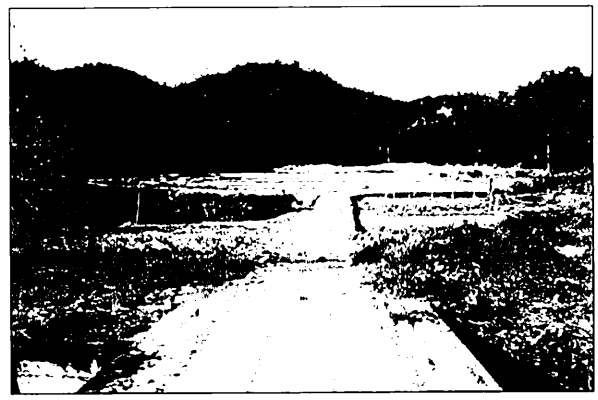
彦根市は、日本一の大きさを誇る琵琶湖の東北部沿岸に位置しており、古くから京阪神・東海・北陸を結ぶ交通の要衝である。古代の東山道に始まり、近世の中山道、そして現在に至っては国道８号や名神高速道路、東海道本線、東海道新幹線が通る人口約 11 万人の地方都市である。



図－１　彦根市の位置図

彦根市は、江戸時代を通じて彦根藩の政治・経済・文化の中心として発展してきたが、その歴史は縄文時代にまで遡り、古代から豊かな大地と湖の恩恵を受けていた北の京極氏の覇権争いが始まり、その境目の城として顕著な役割を担ったのが佐和山城である。

その後、幾度となく佐和山城争奪戦が展開され、織田信長や豊臣秀吉も重要視しており、秀吉は五奉行の筆頭



写真－１　大手から望む佐和山城跡

である石田三成を入城させた。三成は佐和山城を整備したが、1600(慶長 5)年の関ヶ原合戦で敗れ、その２日後、小早川秀秋らの部隊によって落城した。関ヶ原合戦後の論功行賞で佐和山城を与えられたのは、彦根藩の初代藩主となる井伊直政(いいなおまさ)であるが、彦根城の築城は、直政の死後、周辺の古城・廃寺などの部材を集めながら約 20 年の歳月をかけて行われ、城下町の完成とともに城郭都市として成立し、約 400 年の歳月を経た今日でも往時の面影が色濃く残っている。現存する彦根城天守は国宝に、城内にある櫓は重要文化財に指定されており、彦根市民のシンボルとして城下町特有の様々な伝統文化とともに現代に引き継がれている。

*keyword：彦根、まちづくり、歴史的風致

**　彦根市教育委員会文化財部文化財課
(522-0001　滋賀県彦根市尾末町１番 38 号)

写真－２　彦根城天守

２．計画の背景

彦根市には、城や社寺をはじめとする歴史上価値の高い建造物とその周辺の歴史的な景観が非常に豊富に残っており、その歴史に育まれた文化が人々の暮らしの中で共生し、情緒や風情を有する極めて良好な歴史的風致を形成している。

写真－３　名勝玄宮楽々園

しかし一方で、高度経済成長の下で都市開発が進行し、人々のライフスタイルや価値観の多様化などの進展により、本市の歴史的風致が損なわれつつあるのが現状である。彦根には歴史の中で培われてきた伝統文化や伝統技術によって形成されてきた歴史的建造物や美術工芸品など歴史文化遺産が残されており、今後、さらに彦根の個性を磨き魅力を高めていくには、これらの歴史文化遺産を保存活用しながら、彦根の歴史的風致を維持向上し、後世に伝えていくことが重要である。

また近年、「彦根城」を世界遺産に登録するための運動などに関連して、彦根の歴史文化遺産に関する市民の関心が高くなり、その価値の再評価と保護が強く求められるようになり、さらには周辺環境の保護や整備が求められている。このような背景のもと、2008(平成 20)年 11 月に施行された「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」(平成 20 年法律第 40 号。以下「法」という。)により、「彦根市歴史的風致維持向上計画」を作成することになった。

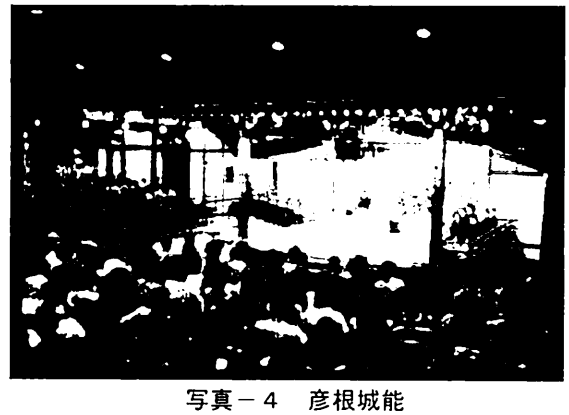
３．計画の概要

彦根に息づいている固有の歴史的風致は、次のようなものがあり、人々の多様な生活のなかに溶け込んでいるが、生活様式の変化によって、歴史的風致の存続は大きく影響されることになる。

(1) 大名文化の継承

彦根は、井伊家 35 万石(藩領 30 万石と幕府預り米 5 万石)の伝統が根付き、伝統芸能や伝統行事が多く展開されている。

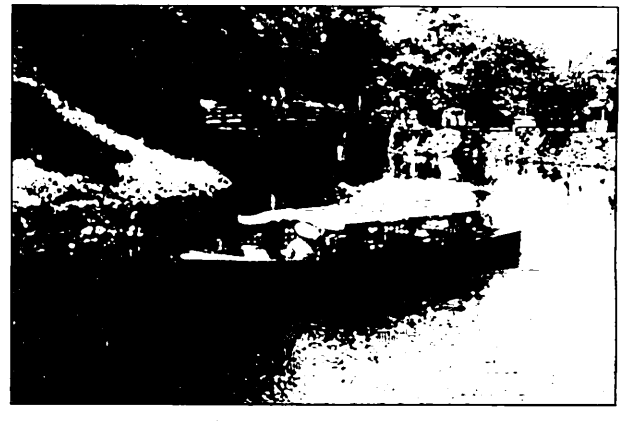
江戸幕府は能を奨励し、これに倣って彦根藩も能役者を召抱えていた。彦根城の表御殿を復元した彦根城博物館には 1800 年(寛政 12 年)に築造された能舞台があり、それ自体が歴史的建造物であるとともに、現在でも、子どもたちや大学生などが発表会などで使用し、年に数回



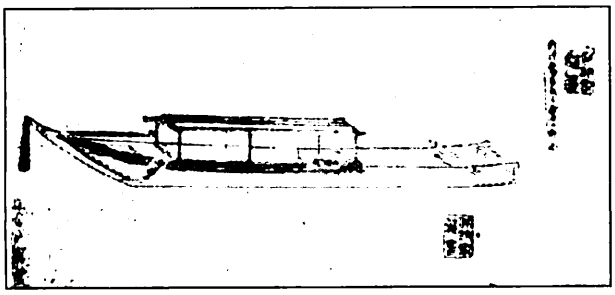
写真－４　彦根城能

の公演会も開催されている。

彦根藩に伝来する茶道具や記録から、歴代藩主は茶の湯を嗜んだことが知られており、特に 13 代井伊直弼(いいなおすけ)は、石州流の一派を創立するほど精通していた。彼が青年時代を過ごした埋木舎（うもれぎのや）や彦根城博物館内には直弼ゆかりの茶室があり、大名茶の世界を満喫できる。また博物館では小学生を対象にした茶の湯体験を開催し、子どもたちは「もてなしの文化」を学び、「ほんものとの出会い」を経験することができる。



写真－５　内堀の屋形船



図－２　御好屋形船の絵図

現在、彦根城の堀では、井伊家に伝来した「御好屋形船」(おすきやかたぶね) の絵図を元に復元した屋形船が運行しており、のんびりと船上から四季の移ろいを感じることができる。江戸時代には彦根城の堀から松原内湖を通じて琵琶湖につながっており、軍事的な目的で構築されたものであるが、平和な時代の到来とともに藩主の舟遊びに使用されたようである。

いずれも大名文化を代表するものであるが、伝統的建造物を舞台にして活動していることが多く、文化財指定がない建造物は老朽化等に対する整備手法がなく、活動そのものを制限されることがある。

(2) 城下町の伝統

彦根の城下町は、彦根城の築城とともに町割りが始まり、現在の中心市街地を形成している。そこには築城当時から構築された、敵に攻められにくい都市構造があり、「どんつき」や「くいちがい」の道路を有している。その道路沿いには、武家・町家・社寺などが配され、足軽屋敷や魚屋町(うおやまち)などは藩政時代の町割りがそのまま現代の住宅地になっている。

写真－６　足軽屋敷とどんつき

彦根城下の足軽屋敷は、城下町の最も外側に、城下を取り囲むように屋敷を連ね、彦根城と城下町を守備する役割を担っていた。中でも善利組(せりぐみ)の規模が大きく、およそ 700 戸の足軽屋敷が１間半の狭い道路沿いに続いていたが、道路が狭いゆえに車社会への対応ができず、若者世代を中心にまち離れが生じ、歴史的風致を色濃く残している地域で、人口減少と高齢化が進展している。また同時に、歴史的な建造物も急激に減少してきている。

城下の南東には、江戸時代の創業という仏壇店が軒を連ねている。もともと武具職人であったが、武具の需要が少なくなったため仏壇へとその技術を継承していき、「彦根仏壇」という伝統工芸品を作り上げたのである。木地、彫刻、蒔絵、金箔押など７つの工程をそれぞれの職人が分担して制作しており、「工部七職」と呼んで伝統産業を守っているが、後継者不足が深刻な状況となっている。

写真－７　伝統産業の仏壇職人

また城内には、時報鐘(じほうしょう)という時を告げる鐘があり、江戸時代から絶えることなく毎日決まった時間に撞かれ、市民に親しまれている。環境省の「日本の音風景百選」にも選定されているこの鐘の音は、城下の人々とともに日々の生活を営んできており、彦根独自の歴史的風致を形成している。

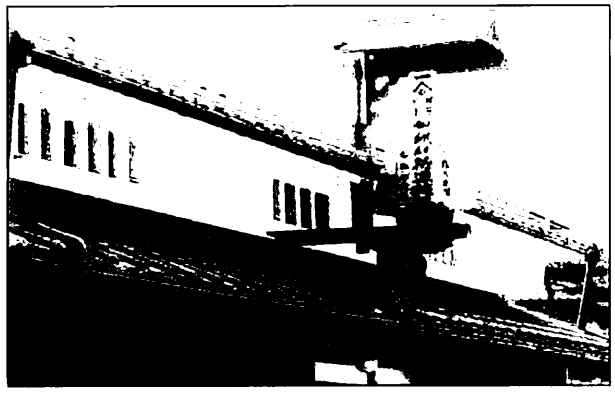
写真－８　彦根城内の時報鐘

(3) 中山道と宿場町

かつて東山道と呼ばれていた街道は、徳川家康が行った五街道の整備とともに中山道と呼ばれるようになり、彦根にも鳥居本宿と高宮宿のふたつの宿場ができた。特に江戸から 64 番目の宿である高宮宿は、中山道にある 69 の宿場のうちで２番目に大きな宿場であった。高宮宿には、本陣１軒、脇本陣２軒があり、詳細な絵図や本陣の表門が現在も残っている。また、宿のほぼ中央には、多賀大社の一の鳥居があり、県指定の文化財となっている。街道沿いにも歴史の風格を感じさせる建造物が残っており、提灯屋や造り酒屋など伝統産業とともに宿場の景観を形成している。

63 番目の宿である鳥居本宿は、近世以前は佐和山城の城下町として形成されてきたが、江戸時代に入って宿場

としての働きを持つことになった。街道筋には、天候の荒れやすい木曽街道への入口にあたるため、柿渋を塗布した道中合羽を商っており、鳥居本宿の名産となっていた。現在も軒下にその看板を見ることができる。



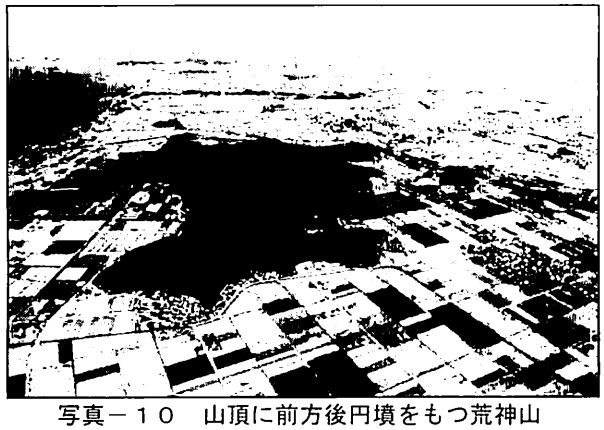
写真－９　中山道鳥居本宿　道中合羽の看板

またもうひとつの名産として、「赤玉神教丸」(あかだましんきょうがん)と称される下痢・腹痛などに効果のある妙薬があり、1658(万治元)年頃の創業以来、現在まで販売が続いている。赤玉神教丸本舗の建造物は、その庭園とともに 2009(平成 21)年に滋賀県の文化財に指定されていて、周辺に残る歴史的建造物と調和しながら宿場の面影をよく残している。

また二つの宿場から彦根城下へとつながる彦根道(ひこねみち)も中山道の引込み線のような機能を有しており、城下町には伝馬町が配され、高札場がおかれていた。

(4) 山と信仰

市域南部の荒神山周辺は、早くから開発の進んだ地域であり、おそらく水稲農耕の伝来とともに水田の開発が進められたと考えられる。荒神山山頂には全長 124m の大型前方後円墳(古墳時代前期)が築かれており、当時、富を一元的に掌握した人物の墓と推測される。その後、山中には小円墳が多数築造されていて群集墳をなし、山全体が葬送の山として機能してきたようであるが、仏教の伝来により、信仰の山へと変化を遂げ、山中の寺社群を中心に「水無月祭」や「太鼓登山」などの祭礼が現在まで続いている。

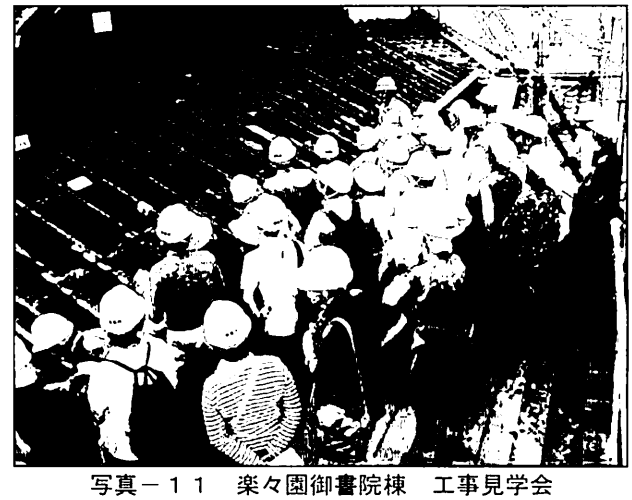


写真－１０　山頂に前方後円墳をもつ荒神山

４．重点区域の設定

彦根の城下町には、国宝・重要文化財建造物などの国指定文化財が集積し、特別史跡彦根城跡を中心にして周囲に歴史的建造物や歴史的なまちなみが数多く残っている。しかし、長い歴史を経て傷みが著しくなり、その保存状態は良好とは言えず、このままでは消滅してしまう危機に瀕しているという現状がある。そのため、城下町で培われた伝統文化や伝統工芸とともに将来に引き継いでいきたいとの思いから「彦根城と城下町地区」の約 400ha を重点区域に設定し、集中的に歴史的風致の維持向上を図ることとした。

この重点区域は、都市計画マスタープランで「旧城下町地域」としてまちづくりの基本方針を示している地域であり、彦根市景観計画における「城下町景観形成地域」とも区域を同じくし、建築物の高さや意匠などについて定め、城下町としての景観を保全するよう、それぞれの計画のなかで補完しあって事業を展開する。また、屋外広告物についても権限委譲を受け条例制定に取り組んでいる。



写真－１１　楽々園御書院棟　工事見学会
(撮影：彦根市、2009)

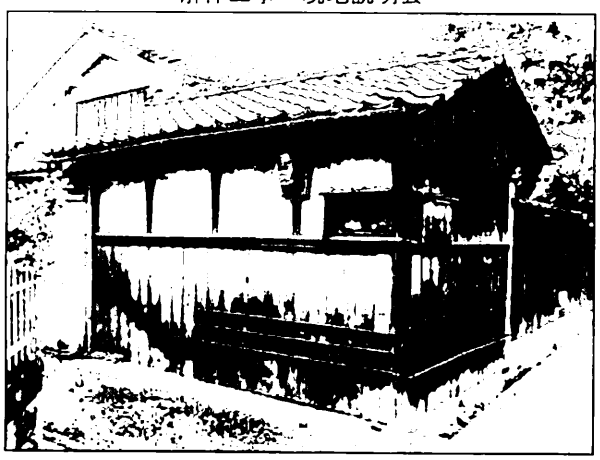
この重点区域に含まれている「特別史跡彦根城跡」、「名勝玄宮楽々園」、「名勝旧彦根藩松原下屋敷（お浜御殿）庭園」の国指定の３件については、個別に保存管理計画や整備基本計画などを定めているため、それぞれの計画に基づいて重点区域の核として積極的な保存修理事業を実施している。特別史跡彦根城跡では、老朽化した石垣の修理を中心として継続的な事業展開を行っている。名勝玄宮楽々園では、楽々園建造物の解体修理や玄宮園の池の護岸整備、名勝範囲の拡大などを実施している。お浜御殿庭園は公有地化を進め、庭園の維持管理に努めている。

市指定の文化財では、「旧池田屋敷長屋門」、「旧彦根藩足軽組屋敷（善利組辻番所と足軽屋敷）」、「金亀会館」、「長曽根口門復原整備」などの歴史的建造物の保存修理事業を実施する。建造物については、全解体工事を含む保存修理が主であるが、長曽根口門については、隣接する寺院に保管されていた門の復原とともに、市内に唯一残る外堀の石垣を元に堀の復原整備を計画している。

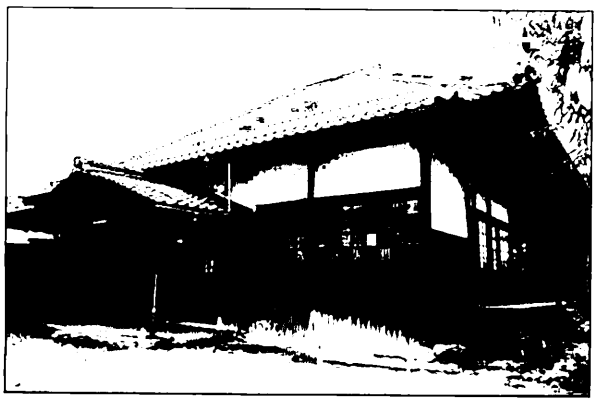
また彦根城を中心として指定文化財が点在している

写真－１２　旧池田屋敷長屋門（着手前）

写真－１３　旧池田屋敷長屋門
解体工事　現地説明会



写真－１４　善利組足軽組屋敷辻番所



写真－１５　金亀会館（彦根藩藩校の講堂）

ため、各々を連携させるよう周辺整備や、その連携を強化するためのまち歩きネットワークやパークアンドバイクライドなどのソフト事業も計画し、城下町彦根の奥深さを演出できるよう計画している。

写真－１６　城下町の風情の残るまちなみ

また、城下町の風情を色濃く残している地域では、伝統的建造物群保存地区に向けた調査やまちなみを保全していくためのまちづくり計画を策定するために、まちづくりの担い手である地域住民との話し合いを進めるとともに、住民の率先した地域活動に対して支援を打ち出そうとしている。

５．事業展開の課題

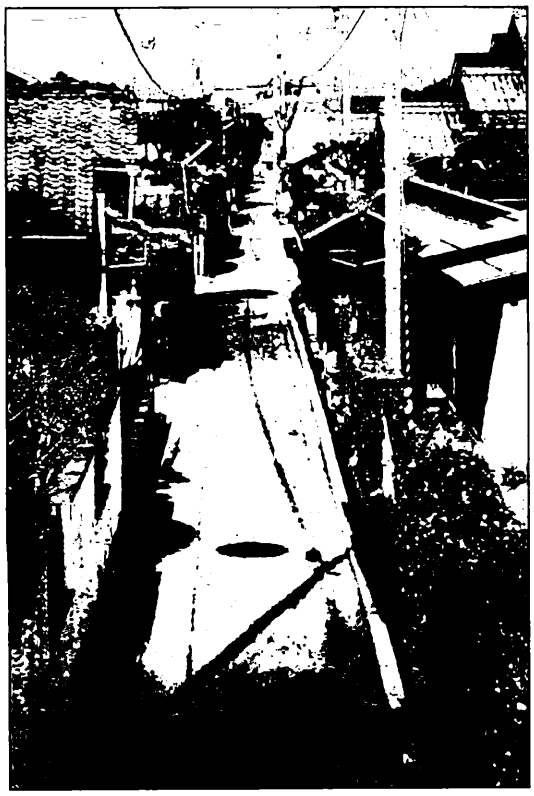
彦根市の歴史的風致維持向上計画を進めていく上では、様々な課題をひとつひとつクリアしていく必要がある。

まず、かねてから実施している国指定文化財に関する事業は、それぞれの計画に基づき、文化庁の指導の下、現状変更の許可を得て進めているが、資料調査や現地での発掘調査など精度の高い復原整備が求められる。そのため、計画そのものが長期計画となり、事業費の確保や調査人員の確保が難しいことがあげられる。

また、市内に点在している歴史的建造物の保存修理に関しては、城下町ゆえに道路が狭く、工事車両の進入に伴う地元自治会との調整や建築基準法に基づく保存建築物の指定などが必要となる。

特に、足軽組屋敷に関しては、地域内の道路が約１間半(約 2.7m)で、どんつきやくいちがいが各所にあり、江戸時代からの風情を醸し出しているが、道路が狭いために建物を建てようとすると中心後退などの規制がかかることになる。しかし、この地域は足軽組屋敷として１間半の道路があるからこそ足軽組屋敷らしさがあるのであって、この道路を 4m に拡幅しては歴史的風致そのものを壊してしまうことになる。今日では、道路が狭いため若者離れが進み、空き家と高齢者が多くなっており、地域に生活する人々にとっても、彦根市としても、安全安心を選択するか、歴史的風致を選択するかが大きな岐路となっている。

彦根城は内堀、中堀、外堀と三重の堀に囲まれていたが、昭和 20 年代のマラリア対策により外堀のほとんどが埋め立てられて、道路や小河川に姿を変えている。その中で、長曽根口付近のみ外堀の石垣が残っているが、



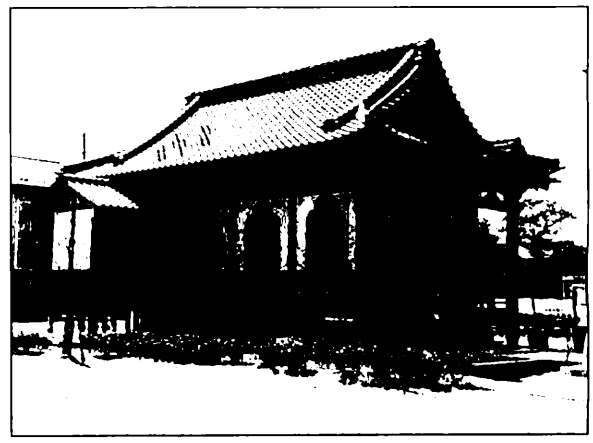
写真－１７　足軽組屋敷の狭隘道路

その前後はコンクリートや矢板護岸となっている。今回の計画では、そこに石垣や門、土塁を復原して公園整備を行うようになっているが、コンクリートや矢板護岸を撤去して、不安定な石垣を復原することに対して、近隣住民の理解が得られるかなど、具体的に事業を展開する上では、まだまだ課題は山積している。

写真－１８　足軽組屋敷の通り

６．今後の取組方針

彦根固有の歴史的風致の維持向上をめざすためには、歴史的建造物の保存修理といったハード面からの整備はもちろんのこと、歴史的建造物の活用やまちなみ保全のための計画策定などソフト面からの取組も重要になると考える。平成 19 年に開催した「国宝・彦根城築城 400 年祭」以降、まちづくりや文化財の保存活用に関わるＮＰＯ等の市民団体が増え、各々の分野で現在も有機的に活動している。歴史まちづくりの推進のためには、市民



写真－１９　ＮＰＯが管理するスミス記念堂
（国登録文化財）

の力は不可欠であるため、彦根市が市民団体や関係機関と連携して、より効率的に事業を進めていかなければならないと考えている。

【参考文献】

彦根市(2008)：「彦根市歴史的風致維持向上計画」

文中の図、写真は、同計画の中から引用している。